

平成二十八年四月十日 入塾式記念講演

「君たちに期待するもの―学ぶこと・知ること・行うこと―」

東京大学名誉教授 木村 清孝 先生

皆さん、おはようございます（塾生「おはようございます」）。新入塾生の皆さん、ご父母・保護者の皆様、本日は誠にめでとうございます。こういう貴重な機会をいただきましたこと、大変うれしく存じます。

ただいま塾友会会長の柳川様から、身に余る過分のご紹介をいただきました木村です。そんなに立派なことをしてきたわけではございませんが、塾生時代を含め、私自身の経験を踏まえて、多少は皆さんの役に立ててもらえるかもしれない、そういうお話をさせていただきたいと思えます。いま柳川会長からのお話にもありましたように、私はお寺で長男として生まれました。九州の天草にある曹洞宗のお寺です。今の塾生さんの中にも、あるいは同じように、「お寺で生まれた」という方が何人かおられるのではないかと思います。実はお寺で生まれるということは、他の国では

「えく？」と思われることなのです。どうしてかということ、坊さんになる、お寺に入るということは、他の仏教国では、独身を通す、妻帯しないということとほとんど同じ意味だからです。ですから、外国で会議等があつて紹介されますと、よくこのことについて質問が来て、説明に苦労します。ともあれ、ここに日本の仏教のひとつの大きな特徴が表れているということ、まず知っておいていただきたいと思えます。

その後、私は第二次大戦の終戦直後の混乱の中を、特別な事情が生じて、親に連れられて北海道の函館に移りました。小学校から高校までを過ごしたのは函館です。先ほど北海道のご出身の方（塾生）が今も塾におられるのを知って嬉しく思いました。私が東京に出てきて、入塾したのは北寮です。その頃は、札幌の高校の校長をなさった先生が北寮の寮長をしておられ、北

海道出身の塾生がたくさんおりました。現在の塾友会北海道支部も、そういう仲間たち、その後輩たちに支えられています。

大学は、東京教育大学に入りました。かつての東京高等師範と文理大が合併して誕生し、いわゆる六十年安保の激動を経て筑波大学へと変わっていく大学で、その最後の頃に在籍したことになりました。この東京教育大学在学中に、本塾でお世話になったのです。

専攻した分野は、倫理学です。当時の雰囲気では、長男である私は、お寺の跡を継ぐことが当然視されていましたので、「そうするのが運命なら、世の中のこと、人の生き方について、多少は深く考えられる人間にならなければ」という思いも半分あり、また、ある尊敬する先生のお勧めもあつて選んだのですが、労働者や学生のデモが日

常的にあるなど、なかなか落ち着いて勉強できる状況ではありませんでした。そういう時代を塾でお世話になり、その後、東大の大学院に進みました。選んだのは、仏教学を含む「印度哲学」という分野です。しかし、東大の学内も、いろいろの問題で大きく揺れていました。私自身も、新しい思想運動の一環ともいえる、学生たちが集まって社会に訴えかける雑誌を出すような活動に関わったりもしました。しかし、どういうわけか、次第に研究者として歩む流れが自然にできてきました。そして、今日まで、仏教学を含め、大きくいえば東洋思想、東洋哲学の研究者の一人として活動してきております。合わせて、住職としての仕事も務めております。

それからもうひとつ、皆さんは教誨師（きょうかいし）という仕事をご存じでしょうか。いろいろな事情から、罪を犯す人々が世の中には絶えません。罪を犯して刑務所で服役している人たちに対して、宗教的な面からいろいろとお話をして、更正の手助けをする。こういう仕事を教誨師という人たちがしております。函館には少年刑務所——といっても、少年だけではなく、

幅広い年齢層の受刑者が服役しています——があつて、私はその教誨師でもあります。そんなことで、相変わらず、二足のわらじどころか三足のわらじを履き替えるような生活を送っております。

ここで少し話を塾生時代のことに戻させていただきます。私が卒業したのは、昭和三八年、一九六三年です。先ほど触れたように、六十年安保をはさんだ激動の時代です。その頃の塾長は、もちろん創設者の前川喜作先生で、豊饒（かくしゃく）として塾の運営の陣頭に立つておられました。が、塾は非常に人気がありましたので、かなり高い倍率で面接試験がありました。ぜひぶん緊張して、塾長先生を中心とする数人の先生方の質問に答えたことを覚えています。幸いにも、私もそれを経て入塾させてもらったのですが、当時の揺れる大学の状況を反映して、塾での生活もあまり落ち着いたものではありませんでした。塾の先生方にも、ぜひぶんご心配をおかけしたところもあると思います。しかし、塾長先生はじめ、皆さんは、強い信念のもとに対応しておられました。とくに塾長の前川先生は、中にはくつつかかるような議論をす

る学生もいたのですが、そういう学生にもまともに向き合われ、本気で話をされるという態度を常におとりになっていた。そのことが、私には一番強く印象に残っております。そのような信念と熱意が受け継がれてきたからこそ、現在もこうして塾がしっかりと存続してきているのだと、そういう気がいたします。

本当に塾生の時代には、やはり社会が大きく動いていた時代だったことが深く関係していると思いますが、いろいろな経験をさせてもらいました。皆さんは、新しくこの塾に入られて、これから大学生活を送られるわけですが、先ほど理事長先生（前川正雄）から、大変動が数年のうちに起こるだろうというお話がございましたね。今はまさに、私たちがこの塾で過ごした時代とはある面で似ている、しかし、他面では質的に大きく異なる、大変動の時代です。これから皆さんには、そういう時代の様相と自分の姿をしつかりと見据え、自ら考え、先輩たちと一緒に切磋琢磨しながら成長していくってほしいと思います。腹を据え、気合を入れて、自分でものを考え、先ほどの理事長先生の言葉をお借りすれば、まさ

に「みずからを知る」ということを、大きな目標の一つとしてほしいものです。

人類は、誕生以来、いくつかの重要な変革を経て現代に至っています。現代は、そういう大変革の一時期中で、まったく新しい時代に突入していると思います。ひと言で高度文明という言葉で表現することもできるでしょうが、たとえば、人工的な都市空間の中だけで一生を送ることも可能だというのも、その一つの特徴でしょう。人間は、ほんらい自然の存在ですが、どこまで自然との関わりをもちつづけられるのか、もつべきなのか、そういうことを私どもは考えてみなければならぬのではないのでしょうか。

倫理的な面から見ると、今の時代は「新功利主義」と名づけることができます。功利主義というのは、英語ではユーティリタリアニズム (Utilitarianism)、ミルやベンサムといった人たちが提唱した考え方で、社会は「最大多数の最大幸福」の実現をめざすべきだというものです。私は、この考え方が社会思想の主流として現代まで続いてきていると思うのですが、現代は単なるその継承・持続ではなく、微妙な

ところで質的な変容が起こっているのではないかと考えます。それゆえに、私はこれに「ネオ(新)」をつけて呼ぶのです。いま詳しいお話はできませんが、そのもつとも重要なポイントは、幸福の内容を経済的な豊かさだけで計ることができなくなってきたこと、近代国家の枠組みを前提とする「最大多数」の概念が成り立たなくなってきたこと、また、価値観の多様化によって、現実社会における幸福が必ずしも人生の目標やよりどころとされなくなっていることです。

ともあれ、功利主義的な考えただけでは見落とされてしまう大事なものがたくさんあると思います。一例をあげますと、いかに時代が進んでも、高度文明の社会になっても、私たち自身が限りある命をもった存在であるということ、無常の中にあるということ、変わりがありません。それだけに、大昔から、不老不死、あるいは不老長生、若々しく長生きをするということが常に望まれつづけてきています。中国の秦の始皇帝が徐福という使いを送って東の海のかなたにある蓬莱山に不死の仙薬を求めさせたという話は、とくに有名で

すね。そして科学・医療が大きく発展した現代では、この願いが大眾のものとなりました。その一つの表れが、アンチエイジングでしょう。歳をとること自体に逆らって若さをどう維持していくか。二千年百年も昔から人間が望んでいたことが、今、科学的な裏づけをもって、新たな装いをもつて求められている、そのようにいってもいいかもしれません。

科学が進み、医療技術が進んできた中で、日本はかなりの長寿が実現する社会になっております。しかし、深く考えると、決して長寿そのものが尊いわけではなさそうです。人が、自らの生涯において何をどのようになすのか、その質的な価値の方がより重要なのではないのでしょうか。もつと大事なものはあるのだと思います。実際に、古今東西、立派な仕事、本当の意味で人類に希望や力を与えてくれるような仕事をされた方の中には、かなり若くして亡くなっている方も少なくありません。要は、現実の今日の命を悔いなく、正しく生きるということが大切なのだと思えます。

こういう観点から、自分と自分を取り巻く世界全体のことを考えると、何とかしな

ければと思うことが、たくさんあります。例えば、環境問題です。まさに今、世界的な課題として、サステイナビリティ (Sustainability)、つまり人類、そしてこの地球の持続可能性ということがいわれていることをご存じでしょう。人類は持続することができるとか、どうしたらできるのかということが、深刻な問題として浮かびあがってきているわけです。この課題の中心にあるのが、環境問題です。他の生物に比べて大きな脳をもつに至り、高度文明を発展させた人間こそが、地球環境に責任をもち、その持続のためによい方策を立てていかなければならない。反省すべき点は反省し、我慢するところは我慢して、全体の共生的な場をつくり、より安らぎのある世界にしていかなければならないのではないか。精神的なもの、心の問題を含めて、何が本当の喜びにつながるのかということをご一緒に考え、その実現に向けて行動していきたいと強く思うのです。

さて、これから皆さんはそれぞれの大学に通いながら、諸科学について専門的な知識、技術を学んでいかれます。では、そのような科学に支えられた文明を進めてき

た力は何でしょうか。いろいろな見方ができると思いますが、根底には、人間が絶えずより安全で、より便利で、より豊かな生活がしたいと欲し、その実現を目指す中で知識・知恵を、さらには経済力を蓄積してきたことがあるのだらうと思います。この蓄積されたものが受け継がれ、また一歩前へと進める中で、文明がさらに発展する。ですから、文明発展上の「知」の重要性というものは大変なものであるわけですが、実はこの「知」に関しては、いろいろな整理の仕方があります。

これから皆さんが大学で修得されるのは、まさに学習によって得られる科学的な知です。しかし一方で、塾での生活を含め、社会生活をしていく中でいろいろな経験を積む、その経験から得られる知、すなわち経験知や処世知と呼ばれるものの比重も決して小さくはないはずで、両者が相まって、知識は蓄積されていくわけです。

しかし、このような知識としての「知」に対して、それらとは異なる知恵というものがありません。この前の大震災(二〇一一年)のとき、「想定外」ということがよくいわれましたね。それがどういう意味かと

いうと、私どもが蓄積してきた知識、主に科学的な方法によって明らかにされた知識にもとづいて、今後に起こりうる事柄について一定の「想定」がなされる。ところが、現実に起こったことは、それを超えていたということです。現実には、我々自身の限られた経験や、専門の勉強をする中で得られる知識から推定されるものだけでは間に合わないというわけです。では、そういう事柄について、どのように予測し対応すればよいのか。思うに、そのひとつは先人——昔の人たちが言い伝えてきたこと、つまり伝承の中に重要な知恵が隠されているということがあり、それを信じ、大切にするということだと思います。大震災の際にも、ほぼ丸ごと津波に襲われた村がありました。ひとりも津波に呑み込まれませんでした。その村の人々は、「これこれのところに家を建ててはいけないよ」「津波が来たたら、どこどこに逃げましょう」「日ごろから、これこれのことに気をつけましょう」という知恵が継承されてきていた、という話を聞きました。まさに先人の知恵が、多くの人の命を救ったのです。

さらに、これは仏教、とくに大乘仏教において明示されるものですが、以上に述べてきた「知」を包み超える知があるとされ、「智」とか「智慧」と表記されます。私たちが知識と言ひ換えている「知」というのは、物事を相対的にとらえ、客観的に分析し、要素に還元し、再構成するという知り方で知るといふものです。しかし、それだけで物事の真実をすべて知ったことになるとはでしょうか。

皆さんは、般若の面というのをご存じだと思います。この「般若」というのは、実はインド系の言語の一つであるパーリ語のパンニヤー、サンスクリット語のプラジユニヤーの音写語で、知恵の一種を意味します。しかし、それは上に述べたような知とは違います。そこで、区別するために、「般若」と音写したり、意識する場合は「慧(え)」などといいます。あえて説明的に言いかえれば、「根本の知恵」ということになるでしょうか。要は、物事をその本質において捉えると、すべては「空(くう)」である」とか、「真実そのもののあらわれとしてある」とか、「相互の関連性のもとに、調和的に存在する」といえる。そのこ

とをしつかりと見極める。これが般若の知恵なのです。

たとえば、いま私が話をし、皆さんはその私の話を聴いていらっしやる。中には寝ていらっしやる方もおられるけれども(笑)、それも含めて、話すことと聴くこととが調和的に関係しあい、何の障害もなくひとつの場として成り立っています。般若の知恵においては、このようなありのままの調和的でありようを根本的な真実と見るわけです。

こういう見方を踏まえると、ものの見方が変わってまいります。最初から決定的に異なる対立的な要素があつて、それらがどう関係しあうかによってすべては決まるという一般的な捉え方は、逆に二次的なものとなります。たとえば、禅の世界では「自己と他己」という言い方をします。「自己と他人」「自己と他者」という、本質的な相違を前提にした他者の捉え方を捨てて、他者は自己の別の様態である、他としてある己であると認識するわけです。このような捉え方があることを知るだけでも、私たちの他者に対する接し方、私たち自身の生き方が、大きく変わってくるのではないで

でしょうか。

では、どういふところから、私どもの実際的な知識や般若の知恵が生まれてくるのでしょうか。それは、ひと言でいえば、もともと人間という存在がもっている力だといふ外はないと思います。いわゆる「人間力」ですね。私は、数年前まで横浜にある鶴見大学という大学の学長を五年ほど務めました。その折に何度か、学生諸君に「『人間力』を養いなさい」という話をいたしました。大学で学んでいる間に、ぜひトータルな人間としての力を身につけてほしいと願ったのです。

しかし、人間力といつても、あまり大きくて、ピンと来ないかもしれません。少し分析してみると、まず、感覚がもつ力――視力、想像力、直観などがあります。感覚というものは、磨けばより鋭くなり、より素晴らしいはたらきをするようになってくるものだと思います。

ところで、現代において感覚の問題はどういう位置づけをもつでしょうか。一般的にいえば、現代人がもつとも頼りにしているのは、眼で見て知る力でしょうね。これは、いうまでもなく、文字や画像を通じて

送られてくる情報への依存度がきわめて高くなっていることと連動していることです。耳で聞きとる力や鼻で嗅ぎとる力も大切なのに、目もつ見る力に頼りすぎているかもしれないと思います。

けれども、人間がもつ感覚、いわゆる五感は、一つだけではたらくよりも、いくつかが相互に助け合ってはたらくことがより多いのかもしれない。ところが、文明の進んだ社会では、それらが本来のはたらしを失ったり、弱められたりすることも少なくないようです。たとえば、坐禅を何十年もつづけた禅僧は、線香が燃えていってその灰がぽとと落ちる、その落ちる音が聞こえるというんですね。最近では坐禅をするのもお坊さんに限りません。若い女性で朝坐禅に参加するという方もたくさんおられるようです。出会いを求めるときには、そういうところに行ったほうがいいかもしれません（笑）。それはともかく、長いあいだ坐禅の修行、広くいえば、瞑想の修行をし、心を静めている人は、聴覚などの感覚が普通の人よりも鋭くなるのでしようね。また、少し尾籠な話ですが、今は多くのトイレでは芳香剤によってよい

匂いが漂い、便も随意にシャワーで流すことができずね。きれいな音楽を聞けるトイレもあります。このようなトイレでは、清潔なことはよいのですが、便の色や匂いに異常があった場合でも、それを知ることができない。便が体調不良を訴える危険信号を出しているのに、それに気づかないということもあるのではないのでしょうか。つまり、現代人の生活は、本来的に具わっている感覚を維持し、さらにはいつそう研ぎ澄ませていくような生活ではない、ということ。文明社会は、そういう状況をもたらしつつあるのかもしれない。しかし私は、「感覚力」はものの見方を広げ、人生を豊かにする意味でも、とても重要だと思っています。皆さんには、いろいろと工夫して、これを磨いてほしいと思います。

次には、これはいうまでもないのですが、知力を意欲的に拡充していったきたい。それぞれの大学において、専門分野を中心に科学的な知識と技術をしっかり修得するとともに、できるだけ教養を深められるように努めてほしいものです。

人間力の中身として、私が第三に挙げたいのは、想像力、イメージする力です。こ

れは、もしかすると、いま急速に欠けてきているものかもしれません。というのは、これだけIT時代になって、いろいろな情報がボタンひとつですぐ見いだされるようになりました。しかしながら、たとえば現実には満天の星空を見上げて何かを感じることと、バーチャル空間で星空を見て何かを感じるのでは、やはり違うのではないのでしょうか。生のものに接する中で、初めて得られる大きな想像力。部屋に閉じこもってパソコンを操作し、画面を見て知るだけで満足しないでほしい。常に心して、もつと外へ出ていき、リアルなものに触れ、日々イメージする力をひろげてほしいと思います。

たとえば仏教には、私たちの一瞬の思いの中に三千大千世界が収まる、という教説があります。三千大千世界というのは、天台宗で大成された宇宙観で、基本となる一世界とは、おおむね私たちが住んでいる地球を含む太陽系宇宙に相当します。これを千個集めた大宇宙を小千世界、この小千世界の千個の集合体を中千世界、その中千世界の千個の集合体を大千世界と名づけます。したがって、この教説によると、私た

ちの瞬間の心の動きに関わる大宇宙は、私たちが知っている太陽系宇宙を小宇宙と名づければ、小宇宙の千の三乗、つまり、十億の小宇宙からなる大宇宙とつながっている、ということになります。何とも壮大な宇宙がイメージされているではありませんか。現代の天文学では、太陽系宇宙の他にきわめて多くの宇宙が存在することが知られてきています。そういう広大な宇宙とつながっている自分を想像するだけでも、私たちのものの考え方は大きく変わってくるでしょう。

さらに、「直観力」も、重要です。最近 はあまり問題にされなくなり、言葉としてもほとんど消えてしまったようにも感じます。けれども、たとえばノーベル賞級の業績につながるアイディアなども、地道な研究をしっかりと進めていく中で、ふと浮かびあがってくる、直観的に思いつくといったケースもあるようです。仏教の世界では、四世紀頃から潜在意識のはたらきが深く探求され、いわゆる自我意識のさらに奥にアーラヤ識というものの存在を見出すのですが、直観というのは、このアーラヤ識の中で醸成され、それが何かのきつ

けで突然現れてくるのではないかと、私は考えています。

そろそろまとめのお話をすべき時間となりました。いま私たちは、情報化社会の真ただ中に生きています。まことに多くの情報に囲まれ、気づかないうちに情報に踊らされていたりもします。それだけに、いろいろな情報に接する中で、常にどれが正しい情報か、その選択をする必要があります。信頼できる情報か、信頼できない情報かを見極めていく術を、少しずつでも着実に身につけていってほしいと思います。

コピーという言葉 皆さんはご存知でしょうか。コピーしてペーストすることです。つまり、たとえば大学のゼミでレポートの提出を求められたとき、苦し紛れにパソコンやスマホを使って、その情報が正しいかどうかを吟味することなく、テーマに合うような文章や資料をいくつか探り出し、それらをコピーしつなぎあわせて形をつけてしまう、といったことです。こんなレポートの仕上げ方は、皆さんには絶対にしてほしくないですね。そのテーマに真正面から向き合い、自分で考え、多少格好が悪くても苦勞しながら作り上げる。そ

ういう取り組み方から、学ぶことのほんとうの面白さを知るとともに、「知」の実力がついてくるのだと思います。

そして最終的には、修得した「知」の力を「行い」へとつなげていくことを期待したい。一般的にいえば、現代は、自分自身で物事を決め、自分の足で立つということがいっそう難しくなり、また、それなしでもすませられるような時代になりつつあります。実際、まわりを見て調子を合わせるといえるのは楽ですが、それだけでは、決してほんとうの意味で自分を知ることもしできないし、充実した人生にいくこともできないと思います。苦勞してでも、やはり自分の頭で考え、自分の足で立つということを、ぜひ眼目にしていただきたいですね。

皆さんは、幸いなことに目指す大学に入られました。これから学びたいと思っていられることも、また学ぶべきこともたくさんあるはず。そういう学びを通して、正しく知る、物事の真実を知っていく、そしてその知を行動へと結びつけていってほしいと思います。

中国の古典に『大學』という書物がござ

います。明治時代に、この書名を借りて

University の訳語としたのでしようが、

大学は、人生や世界の真実を大きく深く学んでいく場です。そして、このかけがえない経験の中で、大きな知を得ていく。大知というのは、生活に直接関わることや現象的な物事にとどまらず、それらの奥にあるもの、それらを包みこんでいるものまで目を向けることによつて得られるものです。そういう大きな学びを進め、さらにそれを自らの行動に結びつけていっていただきたいのです。まとめていえば、大学、大知（だいち）、大行（だいぎょう）です。

これから皆さんは、主に大学と塾の生活を通して学びを重ねていかれるわけですが、その目標として、この三つを掲げていただきたいと、先輩の一人として、切に願う次第です。私が長命を保つていければの話ですが、何年か、何十年後かに、成長した皆さんとまたお会いできることを楽しみにさせていただきます。

もしもご質問等がございましたら、簡略なカタチでしていただければ、こちらも簡略なカタチでお答えできるものはしたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

ご清聴、ありがとうございます。（拍手）

● 質疑応答

■ 質問（南寮・本間君）

木村先生のお話の中で、「人間力」という言葉がありました。木村先生は人間力をどのようなものとお考えでしょうか。

● 回答

私がこの語によつて意味させようとしたのは、人間としての総合的な力です。感覚、知力、想像、行動と挙げましたが、前の三つの心のはたらきを第四の行動へとつなげていく。そういうものが柱になるのではないのでしょうか。より細かくいろいろな要素に分けることもできると思ひますが、要約すれば、「自分はこれでいけるんだ」と自信をもって行動に移していける力、そういうものが人間力の中心にあるだろう。そう思っています。

■ 質問（南寮・樋口君）

私は理工学部なので専門は理工なのですが、専門から逸脱し、宗教関係についてひとつ質問がございます。

現在、日本を含め世界情勢は混迷してお

り、特に中東関係ではイスラム教過激派等の影響力が強いと感じています。私の解釈では、宗教というものは死後の世界、死後の問題を扱うために存在していると考えられているのですが、ISILなどは殺戮を繰り返しています。そういうものは、僕たちとはどのような価値観の差異が生じているのか、というのが素朴な疑問でございます。先生のお話でも、「般若の教え」という話があり、根本から考えるという話がありました。先生のお話でも、ISILなどとはどのような価値観の差異があり、このままいくと未来はどのような世界になるか、ということについて、先生のお考えをお聞きしたいです。

● 回答

大変大きな問題についてご質問いただきました。

宗教をどうとらえるか。私は宗教、これは、もともと英語でいえば Religion の訳語なのですが、この訳語自体あまりよいと思いません。そのことを前提にお答えするので、ご質問の中に「死後の世界、死後の問題を扱うのが宗教である」とあり

ました。現在、一般の人々に見られるひとつのとらえ方としては、確かにそのように規定しても間違いではありません。しかし、本来の立場からいいますと、宗教の多くは、むしろ「生と死をみつめることを通して、死の世界を視野に入れながら、現実はどう生きるか」を説いてきたのだと思います。むしろ生のほうに重点があり、今をどう生きるかが中心的な問題になります。そのことがひとつ。

次に、おっしゃるように、今はISILの問題等、あちこちで、宗教が深くからむ形で望ましくない事件や戦争が起こっています。ISILの場合を取り上げれば、かれらの信念の中には、現在の国際的な社会体制、あるいは国家体制を正しくないとする見方があり、それに対する批判や不平不満や苛立ちがあるのだらうと思います。ただ、かれらは、その解決のための平和的な手段を見出していません。そのために、自爆を含めて、戦闘・殺戮などの破壊行為を繰り返しているのです。けれども、やはりそれはおかしい。

そうした行為を通して神の恩寵が得られる、世界へ入っていくという思想があ

りますね。そのような思想をもつこと自体が、いちばん問題なのだと思います。ところが、これは実はイスラム教の中の一部の人々の思想に過ぎません。同じイスラム教の中には、これを真つ向から否定する考え方をとる派もあります。

私はイスラム教の専門ではありませんので、この辺りでご容赦いただきたいですが、最後に、ご参考までに私の宗教観の要点をお話しします。私は、宗教としてもっとも重要なことは、自己を深く観察して、自己のすばらしさと至らなさ、美しさと醜さの両面を知ることの大切さと、現実生きていく人間同士の思いやり、愛や慈悲、さらには人類という枠組みをも超えて、生きとし生けるもの、ひいてはこの世界、この宇宙に対する深い愛情の大切さを明示することだと思っています。

■ 質問（乾寮・土肥君）

「感覚力」について、線香の灰がぽとぽと落ちる音が聞こえるぐらい感覚が研ぎ澄まされるというお話や、今は人間本来の匂いがなくなってきたというお話がありました。僕も、今はほんらい必要なものが失

われていつていると感じています。そういう、社会問題というには少し物足りない、みんなが問題視していないところにも問題はあると僕は思っています。

そこで、坐禅のようなむずかしいことではなく、日ごろからその感覚を鍛えるためにどういうことを心がけたらよいか、ちょっとまだ僕にはわからないので、教えてください。ありがとうございました。

● 回答

私たちの世代が生きてきた世界は、皆さんがこれまで成長し、またこれから経験を積んでいくであろう世界とは、ずいぶん違うと思います。一番大きな違いは、自然的な環境と人工的な環境との比率が逆転し、とくに大都市圏の生活者の場合、今は自ら求めて出ていかなければ、生の自然を体感することができないという点でしょうか。ご質問の「感覚力」の鋭敏さの程度は、おそらく自然に依存する生活の度合いと深く結びついています。ですから、大学と塾と賑やかな街を行ったり来たりという生活を繰り返す中では、「感覚力」を養うことはなかなか難しいでしょうね。

けれども、まったくそれができないというわけでもないと思います。まずは意識して身体を動かすように努めること、自分にあった運動を適度に行うこと、それから、山登りをしたり、海を見にいったり、折に触れて生の自然の中に入っていくことをお勧めしたいです。

■ 質問（南寮・野宮君）

先生のお話の中に、まわりと足並みをそろえるのではなく、主体性をもって行動していこうというお話がありました。私が考えるに、日本人の美徳として協調性というものがあるがやはりあると思うのですが、日本人の美徳としての協調性と、主体性の欠如としての協調性、この二つのちがいを教えてください。ただけたらと思います。

● 回答

これも大変にむずかしい問題ですが、私は基本的に、主体性と協調性は必ずしも矛盾するものではないと考えています。たとえば、このように塾で共同生活をする。その中でいろいろなことが起こるでしょうが、その際には「ここが共に生活する場で

ある」という認識を共有し、譲り合えるものは譲り合う、我慢できることは我慢するということが必要です。そして、実はその中から学びとれるもの、たとえば我慢することによって忍耐力が醸成されるなどといったこともあるんですね。ただ、そういう経験の中で、どうしても譲れないものが出てきた場合は、「自分は皆とは違うが、こうしたい、これでいく」と、自信をもって「我が道」を貫く強さをもってほしいし、それが道理に即したものであれば、他の人たちもそれを認めてくれるのではないかと、私は思います。

それから、「自由と自律」の問題との関係にもなってくるのですが、主体性の確立のためには、自分が拠りどころにするもの、自分の一番大事なものをよく考え、いつもそれに照応させながら自分の歩みを定めていく。そのプロセスにおいては、とうぜん他者に学ぶことも出てくるはずですが、協調というのは、なんとなくベタベタと相手に合わせるというのではありません。むしろ相手を尊重し、相手から学びとることによって、より高い次元にも立つことだと思えます。他者を理解し、他者の生き

方に学ぶということがあって、おそらく自分自身の人間性も出来上がっていくのではないか。そういうかたちで主体性がつくりあげられていくということです。

私の経験でいえば、一九六〇年代、七〇年代に安全保障条約をめぐって大きく社会が動いていた時代、たとえば学生デモに参加するかしないかといった問題についても、ずいぶん友人たちとも議論をし、迷ったことがあります。結果的に、私は塾生のときには一度だけ、やむに已まれずデモに参加しました。しかしその際、デモ隊と警備にあたる機動隊との衝突が次第に激しくなり、危険な状況になってくると、デモ行進そのものがある種の暴力装置に変わるんですね。それがわかったときに、「これはダメだ。これは問題の解決にはつながらない。私にはついていけない」と、デモに決別——客観的には脱落——したのであります。いわば私の主体性が試され、ある種の確信が得られた一瞬でした。

いろいろな状況の中で、おかれた場によって相違があると思いますが、どこかで「これは間違っている」と思ったら引かなければいけないし、「これで行くんだ」と

思ったらぶつかっても進めるべきものではないでしょうか。そこに初めて自分らしい自分が出てくるのではないか。私はそんなふうを考えております。

■司会

お話も尽きませんが、そろそろお時間になりましたので、これで記念講演を終了とさせていただきます。ありがとうございます。（拍手）